



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「個我による創出説」とバクティ理論の関係
Author(s)	眞鍋, 智裕; Manabe, Tomohiro
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 175, 1 (左) -24 (左)
Issue Date	2025-03-28
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.175.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94348
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_175_Manabe.pdf



「個我による創出説」とバクティ理論の関係¹

眞 鍋 智 裕

1. 序

後期アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (Advaita Vedānta, 以後、アドヴァイタ学派と略記) の学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, ca. 16th-17th Century CE, 以後マドゥスーダナと略記) は、その著作『信愛の霊薬』(*Bhaktirasāyana*, BhR) と自註『信愛の霊薬註』(*Bhaktirasāyanaṭīkā*, BhRT) の第一章において、バクティ (bhakti, 信愛) を以下のようなものと論じている。すなわち、先ず心 (citta, 思考器官 manas etc.) が最高神 (parameśvara, īśvara) に対する愛などの熱情によって蕩け (druti, druta), その蕩けた内的器官が最高神の形相 (ākāra) を獲得し、その最高神の形相が二度と心からなくならずに永続する状態にあることがバクティであると論じている²。マドゥスーダナはその際に、心が最高神を始めとする対象の形相を獲得する前に、蕩けた状態に至ることの根拠として、アドヴァイタ学派の開祖シャンカラ (Śaṅkara, ca. 756-772) の著作 *Upadeśasāhasrī* (Upad) における Padyabandha 14.3-4 と、シャンカラの弟子であるスレーシュヴァラ (Sureśvara, ca. 8th-9th Century CE) の著作 *Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣyavārttika* (BAUBhV) 1.2.103 を、BhR 1.21-

¹ 本稿は、日本印度学仏教学会第 75 回学術大会 (2024 年 9 月 7 日(土)・8 日(日), 駒澤大学駒沢キャンパス) において執筆者が行った学術発表「「個我による創出説」とバクティ理論」に基づくものである。

² Nelson [2004], Gupta [2006], 眞鍋 [2021] 参照。

22, 24 として引用している。しかしこの Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 は、本来は対象認識の文脈において見られるものであり、対象に対する熱情によって心が蕩けるという感情論的なものではなく、マドゥスーダナが認識論的なものから感情論的なものへ読み替えてバクティの議論に組み込んだものと考えられる³。

また BhR では、この Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 の引用のすぐ後の BhR 1.26 で、同じくマドゥスーダナのバクティ理論の妥当性の根拠として、彼に先行するアドヴァイタ学派の文献 *Pañcadaśī* (PD)⁴ の 4.25 が引用されている。ここで、当該の PD の第四章「二元の識別章」(Dvaitavivekaprakaraṇa) を見てみると、Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 が PD 4.28-30 として引用されており、PD 4.25 をも含む一連の議論上に置かれている。そしてその議論とは、世界 (jagat, 二元 dvaita, 現象世界 prapañca) に関して、「主宰神による創出」(īśvarasṛṣṭi) と同時に「個我による創出」(jīvasṛṣṭi) が成立することを論じたものである。以上のように、PD における「個我による創出説」を論じた四つの詩節が BhR においてはバクティ理論の妥当性の根拠として引用されていることから、PD の「個我による創出説」とマドゥスーダナのバクティ理論には何らかの関係があることが窺える。

本稿では、先ず PD の当該議論箇所 (PD 4.18-31) に検討を加え、上記の四

³ 執筆者はこの点について以前に論じたことがある。眞鍋 [2021] 参照。

⁴ PD はヴィディヤーラニヤ (Vidyāraṇya, ca. 14th Century CE) に帰されているが、このヴィディヤーラニヤがパーラティーティールタ (Bhāratitīrtha) のことであるのか、または彼の弟子であるマダヴァ (Mādhava)・ヴィディヤーラニヤのことであるのか、異説がある。Mahadevan [1938: 1-7], Nachane [2000: 261f], Goodding [2002: 6-9], Prem Pahlajrai [2005], Joshi [2008: 13-43] 等参照。本稿ではこの問題については触れないこととするが、マドゥスーダナは PD を単にヴィディヤーラニヤの著作とのみ言及している。BhRT 62, 16 (on BhR 1.26): pañcadaśaprakaraṇyām¹⁾ vidyāraṇyaśrīpādair²⁾ apy³⁾ ayam artho⁴⁾ darśitaḥ (『十五章篇』において、ヴィディヤーラニヤ聖上足によっても、以上の意味内容が示された。1) 'daśaprakaraṇyām' INaNB; 'daśyām' BGJR; 'daśaprakaraṇyām' L. 2) vidyāraṇya' BGIJLNaR; śrividyaṇya' Nb, 'śrīpādair' ILNaNB; 'ir' BG; 'pādair' JR. 3) apy] BGJNaNB; om. I. 4) artho] BGIJNaNB; evārtho L.

詩節がどのような文脈で登場するのかを明らかにする。続いて BhR (T) において当該の四詩節がどのような意図を持って引用されているのかを確認する。そのことを通じて、PD の「個我による創出説」と BhR のバクティ理論にどのような関係があるのか、換言すればマドゥスーダナが PD における創出説という存在論的な議論をどのようにバクティという感情論的な議論に接合したのか、ということを明らかにする。結論を先取りすれば、「個我による創出説」とバクティ理論とは、同じ感情論的枠組みを共有しながらも、対象の形相が「創出される」点に焦点を当てたものが「個我の創出説」に、その創出された形相の中でも「感情」としての形相を特に取り上げたものがバクティ理論に結実していったということを示す。

先行研究においては、Upad Padyabandha 14.3-4, BAUBhV 1.2.103, PD 4.25 が BhR に引用されていることは指摘されていた⁵が、PD の「個我による創出説」と BhR のバクティ理論との関係性にまで踏み込んで分析したものはこれまでになかった。その意味では、本稿は BhR に対してより厳密に分析を加えた研究ということになる。

2. *Pañcadaśī* Dvaitavivekaprakaraṇa における「個我による創出説」

先ず、PD Dvaitavivekaprakaraṇa における「個我による創出説」を確認したい⁶。冒頭 PD 4.1 以下、個我による創出説が登場するまでは以下のような

⁵ Nelson [1986: 282].

⁶ PD の翻訳に際しては、Dhole [1899], Shastri [1954], Swāhānanda [1967] を参照した。また PD は韻文作品であるため、読解上、主にラーマクリシュナ (Rāmakṛṣṇa, ca. 14th-15th Century CE) による註釈 *Padadīpikā* (PDi), Achutarāya Modak (ca. 19th Century CE) による註釈 *Pūrṇānandakaumudī* (PK) と Rāyaprolu Liṅgasomyājī (ca. 20th Century CE) による註釈 *Kalyāṇapīyūṣa* (KP) を参照した。このうちラーマクリシュナは、PD の著者であるヴィディヤーニヤの直弟子とされる。Mahadevan [1938: 5], Nachane [2000: 303] 参照。なお、彼は PD 第四章に対する註釈の maṅgala において、バーラティーティールタ・ヴィディヤーニヤと主宰神に対して帰敬している。PDi 107, 2f.: natvā śrībhāratitīrthavidyāraṇyamuniśvarau // mayā dvaitavivekasya kriyate

議論展開となっている。

4.1. maṅgala

4.2-9. 主宰神（ブラフマン）による世界創出の根拠となる諸ウパニ
シャッドの列挙

4.10. 主宰神が個我（jīva）の姿をとって身体に入る

4.11. 個我は、精神性（caitanya）と微細身（līṅgadeha）と微細身にある
心の写像（cicchāyā）からなる

4.12-13. 個我は主宰神の幻力（māyā）のために迷い、悲嘆する

そしてPD 4.14 から個我による世界創出が説き始められるが、以下に、主宰
神による創出と対比的に個我による創出が提示されている PD 4.20-23 を挙
げる。

PD 4.20-23.

īsanirmitamaṇyāḍau vastuṇy ekavidhe sthite /

bhoktṛdhīvr̥ttinānātvāt tadbhogo bahudheṣyate // 20 //

hṛṣyaty eko maṇiṁ labdhvā krudhyaty anyo hy alābhataḥ /

paśyaty eva virakto 'tra na hṛṣyati na kupyati // 21 //

priyo 'priya upekṣyaś cety ākārā maṇigās trayāḥ /

sṛṣṭā jīvair īśasṛṣṭaṁ rūpaṁ sādharmaṇaṁ triṣu // 22 //

bhāryā snuṣā nanāndā ca yātā mātety anekadhā /

pratiyogidhiyā yoṣid bhidyate na svarūpataḥ // 23 //

主宰神によって創造された（īsanirmita）宝珠等という実在物（vastu）が
一様であると定まっている場合、享受主体の統覚の活動（dhīvr̥tti）は多

padayojanā // 1 //（幸いなるパラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤ仙と主宰神
に敬礼してから、「二元の識別 [章]」についての『パダヨージャーナー』が私（ラーマク
リシュナ）によって作られる）。

数であるので、それ（実在物）の享受は多様であると認められる。

実に、ある者は宝珠を得て喜び、他の者は〔宝珠を〕得ないので怒る。

それ（宝珠）に無関心な者は見るのみで、喜びもしないし怒りもしない。

宝珠にある、好ましい (priya)、好ましくない (apriya)、無視される (upekṣya)、という三つの形相 (ākāra) は、諸個我によって創出された。

三つに共通している姿形 (rūpa) は、主宰者によって創出された。

〔一人の〕女性 (yoṣit) が、関連項 (pratīyogin) を意識することで (dhiyā)、妻 (bhāryā)、息子の妻 (snuṣā)、夫の姉妹 (nanāndr)、夫の兄弟の妻 (yātr)、母 (mātr)、と多様に区別されるのであり、本質上〔区別されるのでは〕ない。

主宰神による創出と個我による創出が、PD 4.20-22 においては宝珠の例によって、また PD 4.23 においては女性の例によって説明されている。上記の記述をまとめると以下のようなだろう。

まず宝珠の例に関して、宝珠という実在物は、その有り様、姿形は一様である。そしてこの宝珠の一様の姿形は、主宰神によって創造されたもの (īśānirmita, = 主宰神によって創出されたもの, īśvaraśṛṣṭa) である。一方、同じその宝珠は、その享受主体である個我の統覚 (dhi) の活動が個我によって異なるので、ある者にとっては好ましいもの、別の者にとっては好ましくないもの、また他の者にとっては無視されるものというように、三様に享受される。この宝珠に関する三様の享受の形相 (あり方, ākāra) は、個我によって創出されたもの (*jīvaśṛṣṭa) である。このように、いわゆる外界の対象として存在している宝珠は主宰神によって創出されたものであるのに対し、その宝珠を対象として生じる個我の享受の諸形相が個我によって創出されたものである。

また、女性の例に関しては、主宰神による創出物と個我による創出物が何であるのか、明示はされていない。しかし、宝珠の例からの類推から、本質上区別されないとのべられている「女性」が主宰神による創出物であると考えられる。一方、諸個我にとってその女性がどのような関係にあるかという

関係項 (pratiyogin) を意識することによって、同じ女性が妻や息子の妻などと多様に区別されるということから、この「妻」や「息子の妻」などという多様な受容 (享受) のあり方 (形相) が個我による創出物ということになるう。

以上のように、宝珠であれ女性であれ、外界の対象としての実在物そのもの (svarūpa, 本質) はその有り様が一樣であり、これが主宰神によって創出されたものである。一方、その主宰神によって創出された実在物を対象として生じる、その実在物の享受、受容のあり方 (形相) は多様であり、それが個我によって創出されたものであるというのである。

ところで、個我による創出物とされる対象の享受の形相の多様性は、主宰神による創出物である外界の対象を個我が認識した結果生じるので、対象の形相が異なっているために生じるのではなく、それはその対象についての知が多様であることを意味しているとも考えることもできる。そのため、続く PD 4.24 では、女性についての妻や息子の妻等という知が異なっているのであって、それらの知の対象である女性には本質上、形相の違いはない、という反論が提示される⁷。この反論に対する答えが示されているのが、BhR にも引用される PD 4.25 である。その答えとは、主宰神によって創出された外界の対象である女性には形相の違いはなくとも、その女性を対象とし、妻等という知の対象となる思考器官に妻等という享受の形相の違いがある、というものである。

⁷ PD 4.24: nanu jñānāni bhidyantām ākāras tu na bhidyate / yośidvapuṣy atīśayo na dṛṣṭo jīvanirmitaḥ // (【反論】しかし、諸の知が区別されるべきである。しかし、[対象の] 形相は区別されない。女性の身体には、個我によって創造された卓越性は見られない)。また、この箇所に対する PDi は以下のものである。PDi 113, 16-18: nanu yośidviṣayāṇi bhāryāsnuṣetyādijñānāny eva bhinnāny upalabhyante, na tu tadviṣayabhūtāyā yośitaḥ svarūpe bhedo dṛṣyate. ataḥ “pratiyogidhiyā yośid bhidyate” (PD 4.23) ity uktam ayuktam iti śaṅkate — nanv iti (【反論】女性を対象とする、妻や息子の妻等という諸の知こそが異なっていると把握されるのであって、それら (諸の知) の対象物である女性に、本質上の違いが見られることはない。したがって、「関連項を意識することで女性が区別される」と述べられたことは理に適っていない、と反論する。ではないか、と)。

PD 4.25.

maivam māmṣamayī yoṣit kācid anyā manomayī /
māmṣamayyā abhede 'pi bhidyate hi manomayī // 25 //

【答】決してそうではない。肉体から成る (māmṣamayī) 女性が〔存在し〕, ある〔肉体から成る女性とは〕別の思考器官から成る〔女性〕 (manomayī) 〔も存在する〕⁸。というのも⁹, 肉体から成る〔女性〕とは〔本質上〕異なっていなくとも, 思考器官から成る〔女性〕は〔様々な〕¹⁰ 区別されるから。

⁸ PD 4.25ab の訳に関しては、肉体から成る女性が存在し、それとは別に思考器官から成る女性も存在する、と解釈している Dhole [1899] と Shastri [1954] に従った。また以下の PK と KP も参照。PK 113, 24f: **kācid anyeti manomayī** (ある別のものとは、思考器官から成るものである), PK 113, 26f: tad evaṃ tattajjivadr̥ṣṭikālpitānyā manomayī **yoṣid** bhinnaiḥva … (それ故以上の様に、それぞれの個我による創出によって想定された、〔肉体から成る女性とは〕別の思考器官から成る女性とは全く〔様々な〕異なっており……), KP 105, 7-9: **māmṣamayī** māmṣavikārā sthūladehaviśiṣṭā **yoṣit kācit**, **manomayī** manovikārā **yoṣit** tato 'nyā bhinnā (ある女性は肉体から成る、即ち肉体という変容を持ち、粗大な身体に限定されたものであり、〔また〕思考器官から成る、即ち思考器官の変容を持つ女性であり、彼女 (肉体から成る女性) とは別のものである、即ち異なっている)。

⁹ “hi” に対しては、PDi では特に註釈が付されておらず、また PK と KP ではその理解が異なり、PK は理由の意味で、KP では確定の意味で理解している。PK 113, 25: **hīr** hetau (というのも [という語は] 理由の意味である), KP 105, 9f: **hi** niścayārthe (実に、とは確定の意味である)。本稿では PK の解釈に従った。

¹⁰ KP は、思考器官から成る女性は肉体から成る女性と区別されると解釈している。KP 105, 10: jñānagocarā **yoṣin māmṣamayyā bhidyate** (知の対象領域である女性 (思考器官から成る女性) は肉体から成る〔女性〕と区別される)。しかし、PDi, PK, KP 全てにおいて、最終的な PD 4.25 の意図は、思考器官から成る女性が多様に成立することである。PDi 113, 22f: jñānavailakṣaṇasya jñeyavailakṣaṇāvinābhūtātvaṃ jñeyākārabhedo 'ṅgikartavya evety āśayena pariharati — **maivam** iti (知の異質性 (= 個別性) は、知られるもの (思考器官から成る女性) の異質性と不可離なものである、知られるものの形相の違いが必ず認められるべきである、ということ在意図して、〔反論を〕排除する。決してそうではない、と), PK 113, 26f: tad evaṃ tattajjivadr̥ṣṭikālpitānyā **manomayī yoṣid** bhinnaiḥva bahuvidhā tv avāśyam evorarikāryeti tātparyam (それ故以上の様に、それぞれの個我による創出によって想定された、〔肉体から成る女性とは〕別の思考

ここでは、「肉体から成る女性」が主宰神による創出物に、「思考器官から成る女性」が個我による創出物に対応している。特に個我による創出物が「思考器官から成る」ものとされていることに関して、先に見た PD 4.21 では享受主体の統覚の活動が多数であるので外界の対象についての享受の形相は多様であると述べられており、また PD 4.23 では、女性に対する関連項を意識することで (dhiyā), 妻等という女性についての享受の形相が多様となると述べられていた。この「意識する」ということは統覚の働きである。そして、統覚 (dhī, = 統覚器官 buddhi) と思考器官はともに、それぞれ内的器官 (antaḥkaraṇa) の一側面であり、心 (citta) とあわせて同義語として使用されていると考えられる。そのため、個我による創出物とは、主宰神による創出物である外界の対象を対象として統覚=思考器官の活動 (vṛtti, 変容) によって生み出されたものであり、それを対象の享受の形相と呼んでいるということになる。またそのため、個我による創出物である女性が「思考器官から成るもの」(manomayī) と呼ばれているのである¹¹。

そして、この PD 4.25 では、註釈によると¹²、女性についての妻や息子の妻

器官から成る女性は、一方、全く異なっており、多様であることが、全く必然的に認められるべきである、という趣意である), KP 105, 17f: evaṃ ca tadākārākāritā manomayī cittavṛttirūpaiva yoṣij jīvapabhogyā. cittavṛttinām nānātvād bhogyayoṣinnānātvam sidhyatīti bhāvaḥ (そして以上のように、彼女(肉体から成る女性)の形相を形相とし、思考器官から成り、他ならぬ心的活動をあり方とする女性が、個我によって享受される。諸の心的活動が多様であるので、享受される女性が多様であることが成立する、という趣意である)。そのため、KP の「思考器官から成る女性が肉体から成る女性と区別される」という限定的な解釈ではなく、思考器官から成る女性が様々に区別される、というように解釈した。

¹¹ また PD 4.19 において、主宰神による創出は幻力の活動を本性とする主宰神の企図 (saṃkalpa) によるものであり、個我による創出は思考器官の活動を本性とする個我の企図によるものであると述べられている。PD 4.19: māyāvṛtityātmako hīsaṃkalpaḥ sādhanam janau / manovṛtityātmako jīvasaṃkalpo bhogasāadhanam // (実に、幻力の活動を本性とする主宰者の企図が[世界の]誕生に対する実現手段である。思考器官の活動を本性とする個我の企図が[個我の]享受の実現手段である)。

¹² fn. 10 の PDi 参照。また、以下の KP も参照。KP 105, 15-18: jñeyā tu tadākārākāritā cittavṛttir eva. tasyā evāntarāyā āntare caitanye pratīphalanasamḥbhavāc caitanyatatpra-

等という知が異なっているのであって、それらの知の対象である女性には本質上形相の違いはない、という反論に対して、妻や息子の妻等という異なった形相を持つのは知ではなくて、その知の直接的な対象である思考器官から成る諸の対象（ex. 思考器官から成る女性）である、と答えているのである。またその思考器官から成る諸の対象は、本質的には、一様である外界の対象（ex. 肉体から成る女性）とは異ならないけれども、その外界の対象を対象とする思考器官の様々な活動に応じて多様な形相を持つというのである。

PD 4.24-25 における対論者と定説者の主張は以下のように整理できよう。

・一つのものが多様な形相を持つことになる過程¹³

反論者

外界の対象（一様）→ 様々な知（多様）

定説者

外界の対象（一様）→ 思考器官から成る諸対象（多様）→ 様々な知（多様）

以上のような定説者の返答に対して、PD 4.26 においてさらに以下の反論が為される。すなわち、錯乱・夢・想像・想起といった、外界の対象を対象としていない認識の場合には、知の対象は思考器官から成るものであるが、目覚めている時には知覚等の認識根拠によって外界の対象を認識しているのであって、思考器官から成るものを対象としているのではない、というので

tiphalanam eva jñānam iti sidhyati. evaṃ ca tadākārākāritā manomayī cittavṛttirūpaiva yoṣij jīvapabhogyā. cittavṛttināṃ nānātvād bhogyayoṣinnānātvam sidhyatiti bhāvaḥ (一方、知られる[女性]は、彼女(肉体から成る女性)の形相を形相とする心的活動に他ならない。同じ彼女(肉体から成る女性)と異なる[女性]が内的な精神性に映ることが可能であるから、精神性とその(精神性の)映像こそが知であることが成立する。そして以上のように、彼女(肉体から成る女性)の形相を形相とし、思考器官から成り、他ならぬ心的活動をあり方とする女性が、個我によって享受される。諸の心的活動が多様であるので、享受される女性が多様であることが成立する、という趣意である)。

¹³ 本稿の図における「→」は因果関係を示している。

ある¹⁴。

以上の反論に対して、PD 4.27 では思考器官の活動である当の認識根拠が認識対象である外界の対象の形相を持つので反論はあたらないと答え、PD 4.28-30 でその典拠として Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 を引用する。

bāḍhaṃ māne tu meyena yogāt syād viṣayākṛtiḥ /
 bhāṣyavārtikakārābhyām ayam artha udīrtaḥ // 27 //
 mūṣāsikṭaṃ yathā tābhraṃ tannibhaṃ jāyate tathā /
 rūpādīn vyāpnuvac cittaṃ tannibhaṃ dr̥śyate dhruvam // 28 //
 (= Upad Padyabandha 4.3)
 vyañjako vā yathāloko vyaṅgyasyākāratām iyāt /
 sarvārthavyañjakatvād dhīr arthākārā pradṛśyate // 29 //
 (= Upad Padyabandha 4.4.)
 mātūr mānābhiniṣpattir niṣpannaṃ meyam eti tat /
 meyābhisamgataṃ tac ca meyābhatvaṃ prapadyate // 30 //
 (= BAUBhV 1.2.103)

【答】確かに。しかし、[認識] 手段 (māna, 認識根拠) において、対象の形 (viṣayākṛti) が認識対象との結合に基づいて有るだろう。『註解』作者 (シャンカラ) と『評釈』作者 (スレーシュヴァラ) によって、以

¹⁴ PD 4.26: bhrāntisvapnāmanorājayasmṛtiṣv astu manomayam / jāgranmānena meyasya na manomayateti cet // (【反論】錯乱・夢・想像・想起においては、思考器官から成るものはあってよい。覚醒 [状態における認識] 手段によって認識されるものが思考器官から成るものであることはない、という [反論があると] すると……), PDi 113, 28f: nanu bhrāntyādīsthalē bāhyaviṣayābhāvāt tatrātyaṃ vastu manomayam astu. pramītiṣṭhalē tu tad anupapannaṃ, bāhyavastunaḥ sattvād iti śaṅkate (【反論】錯乱等の場合には、外界の対象が存在しないので、そこ (錯乱等) に属する実在は思考器官から成るものに違いない。しかし、正しい知の場合には、以上のこと (実在が思考器官から成るものであること) は起こり得ない。外界の実在が存在しているから、と [反論者が] 反論する)。ここでは文脈上、認識根拠の中でも特に知覚が問題とされているようである。

上の意味内容¹⁵が述べられた。

鑄型に注がれた銅がそのように（その鑄型の形を持つように）なるように、心（citta）が色等に遍満して、必ずそのように（色等の形を持つように）なることが見られる。

あるいは、[対象を]照らし出す光が照らし出されるものの形相となるように、統覚（dhi）は、全ての対象を照らし出すものであるので、対象の形相を持つものと見られる。

認識主体から[認識]手段が出現し、生じたそれ（認識手段）は認識対象に達する。またそれ（認識手段）は、認識対象と結びつき、認識対象の顕現を持つものとなる。

ここでは、「確かに」と、反論者の言うように、目覚めている時の認識根拠による知には、その認識対象として外界の対象が存在していることを認めているが、そうではあっても、その認識根拠がその外界の対象と結合することによってその形相を持つようになることが述べられている。また、典拠として引用されている Upad に心や統覚という思考器官と共に内的器官の別名とされているものが外界の対象の形相を持つことが述べられているため、PD の言う認識根拠が内的器官のことを意図していることが伺われる¹⁶。そして、典拠として引用されている Upad と BAUBhV の何れにおいても、内的器官やそれを意図した認識根拠が、対象の認識にあたって外界の対象の形相を持

¹⁵ 以下の PDi によれば、ここは対論者の反論に答えた箇所である。そのため、“*ayam arthaḥ*”を「以上の意味内容」と理解した。PDi 114, 5f: *nanv idaṃ svakapolakālpitam ity āśaṅkyāha — bhāṣyeti*（【反論】以上のことは、自分の類ででっちあげたものである、という【反論を】想定して、【答】答える。『註解』と）。

¹⁶ KP では、認識根拠は「内的器官の活動」や「内的器官をあり方とするもの」と言い換えられている。KP 106, 7 (on PD 4.27): *māne antaḥkaraṇavṛttau ...*（【認識】手段において、すなわち内的器官の活動において）、KP 107, 10f. (on PD 4.30): *mātuḥ sādhiṣṭhānabud-dhigatacidābhāsan mānābhiniṣpattir mānasyāntaḥkaraṇarūpyotpattir bhavati*（認識主体から、即ち基盤を持つ統覚にある心の顕現から、【認識】手段の出現、即ち内的器官をあり方とする【認識】手段の生起が起こる）。

つことが明示されている。

続く PD 4.31 においては、外界の対象という主宰神による創出物の他に、統覚から成る対象という個我による創出物があることが、壺 (ghaṭa) を例として結論づけられている¹⁷。これ以降、PD ではこの個我による創出物が、束縛の原因であることが論じられていく¹⁸。

以上の検討によって、当該の PD 4.25 と 28-30 を含む「個我による創出」という存在論的な議論は、外界の対象は一樣 (ex. 女性) であるのに、それを対象とする知が多様に現れる (ex. 妻、息子の嫁 etc.) という事態に対して、その理由を、その外界の対象を対象とする内的器官が多様な形相を取ることに求めるといふ、認識論的議論と密接な関係を持つものであることが明らかとなった。内的器官が多様な形相を取ることが、それらの形相の「創出」と、存在論的な表現で表されているのである。さらに、ここで注目したいのは、個我による創出は享受の多様性に関わるものであるもので、認識だけではなく、PD 4.21-22 で宝珠に対する好・悪・無関心が論じられていたように感情をも射程に入れた理論であるということである。このことは、一樣な外界の対象に対して多様な知が生じる過程と一樣な外界の対象に対して多様な感情が生じる過程は同じであるということを示している。この点は、バクティ理論という感情論的議論を考察する上でも注目すべき点である。

¹⁷ PD 4.31: saty evaṃ viṣayau dvau sto ghaṭau mṛnmayadhimayau / mṛnmayo mānameyaḥ syāt sākṣibhāsyas tu dhimayaḥ // (以上のようにあれば、土から成る壺と統覚から成る壺という二つの対象がある。土から成る〔壺〕は〔認識〕手段によって〔認識〕対象とされるものに違いなく、一方、統覚から成る〔壺〕は目撃者によって照らされる (認識される) ものに違いない)。ちなみに、この PD 4.31d にあるように、個我による創出物は、目撃者 (sākṣin), つまり精神性そのものであるアートマンの認識対象である。

¹⁸ PD 4.32: anvayavyatirekābhyāṃ dhimayo jivabandhakṛt / saty asmin sukhaduḥkhe stas tasminn asati na dvayam // (肯定的随伴と否定的随伴によって、統覚から成るものが個我の束縛を為す。それ (統覚から成るもの) がある時、楽と苦とがあり、それ (統覚から成るもの) が無い時、二元はない)。

* 感情の多様性発生の過程

外界の対象（一様, ex. 宝珠 etc.）→ 思考器官から成る諸対象／諸形相
（多様, ex. 好ましいもの, 好ましくないもの, 関心をひかないもの etc.）
→ 諸感情（多様, ex. 好・悪・無関心 etc.）

3. *Bhaktirasāyana (ṭikā)* におけるバクティ理論と「個我による創出説」の関係

続いて、BhR (ṭ) において、マドゥスーダナがどのような意図を持って当該の PD 4.25 と 4.28-30 を引用しているのか、ということを検討し、そのことによって彼が「個我による創出説」をどのようにバクティ理論に接合したのか、ということについて考察していきたい。

先ず、当該の PD の四詩節の引用に対する検討に先立って、マドゥスーダナがバクティをどのようなものと考えているのか、ということを以下の考察に必要な限りでごく簡潔に確認する。マドゥスーダナはバクティを手段としてのバクティ (*sādhanabhakti) と結果としてのバクティ (*sādhya bhakti/phalabhakti) との二種に分類している¹⁹ が、本稿の主題に関わるのは結果としてのバクティであるため、以下では結果としてのバクティをバクティとして論じる。マドゥスーダナのバクティ理論によると、バクティとは、主の規範 (bhāgavatadharma, bhagavaddharma, = 手段としてのバクティ) の遂行によって最高神への愛情等が増大することで蕩けた内的器官 (心) に、恒常的に最高神の形相が入り込んだ状態のことを指している²⁰。また、この内的器官に恒常的に入り込んだ最高神の形相は潜勢力 (vāsanā) や恒常的感情 (sthāyibhāva) 等とも呼ばれる²¹。

¹⁹ Gupta [2006: 131-136], 眞鍋 [2018] 参照。

²⁰ 眞鍋 [2021: 285f.] 参照。

²¹ BhR 1.6: drute citte vinikṣiptasvākāro yas tu vastunā / saṃskāravāsanābhāvabhāvanāśabdabhāg asau // (実在によって、蕩けた心に投影された[主宰神]自身の形相、それ

続いて、PD の当該四詩節が BhR (T) にどのように引用されているのか、具体的に見ていきたい。PD 4.28-30 については、執筆者はすでに眞鍋[2021]において論じている。その際に執筆者は、マドゥスーダナは PD 4.28-30 (= Upad Padyabhandha 14.3-4, BAUBhV 1.2.103) を「心が対象の形相を得ることは心が蕩けることに先行される」ことの典拠として引用している²² こと、しかし当該の Upad と BAUBhV は「心が対象の形相を得る」ことの典拠とはなり得ても、そのことが「心が蕩けることに先行される」ことの典拠とはなり得ないことを指摘した。さらに、マドゥスーダナは、蕩けた心に入り込んだ対象の形相は二度と心からなくなることはない、と主張しているため、「心が蕩けることに先行される」心が対象の形相を得ることとは、文字通り恒常的感情のみに言われうることであることを指摘した²³ 上で、マドゥスーダナのバクティ理論は、アドヴァイタ教学の伝統における対象認識の理論を応用したものであることも指摘した。

ところで、すでに確認したように、PD 第四章において、マドゥスーダナも引用する Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 も引用しつつ、外界の対象に対する知の発生過程と感情の発生過程が同じである²⁴ ということ、またそれぞれの場合に内的器官が対象の形相を取ることはすでに説かれ

は、潜在印象 (saṃskāra), 潜勢力 (vāsanā), 感情 (bhāva), 習慣力 (bhāvanā) という語で呼ばれる), BhR 1.9ab: sthāyibhāvagirāto 'sau vastvākāro 'bhidhiyate / (したがって、この実在 (主宰神) の形相が、恒常的感情という語で直接表示されている)。

²² BhRT 59, 6f. (on BhR 1.21): dravibhāvapūrvakaṃ cittasya viṣayākārabhajanam ity atra bhāṣyakāravacanam udāharati (心が対象の形相を得ることは、蕩けることに先行される、というこの点に関して、『註解』作者 (シャンカラ) の言葉を引用する)。また眞鍋[2021] 参照。

²³ 実際には、眞鍋[2021] では恒常的感情を、最高神を対象とするものに限定して論じた。しかし、後に言及するように、恒常的感情は最高神を対象とするバクティに限定されるものではない。この場を借りて訂正させていただきたい。

²⁴ 厳密に言えば、PD において示されているのは、一様な外界の対象に対して多様な知が生じる過程と一様な外界の対象に対して多様な感情が生じる過程は同じであるということである。しかし、このことを外界の対象に対する知の発生過程と外界の対象に対する感情が発生する過程が同じであると理解しても問題はないと考える。

ている。PD 4.25 も引用するマドゥスーダナが、この PD の議論を知らなかったとは到底考えられない。そのため、マドゥスーダナが Upad や BAUBhV の認識論的議論を感情論的議論に応用したのではなく、むしろマドゥスーダナは、Upad や BAUBhV を感情論的文脈も含むものとして使用している PD の個我による創出説を通じて、それらを感情論としてバクティ理論に採り入れたのだと考えられる²⁵。しかしそうであっても、個我による創出説には心が蕩けることは説かれておらず、また恒常的感情という特殊な感情も論じられていないため、Upad と BAUBhV を「心が対象の形相を得ることは心が蕩けることに先行される」ことが論じられていると理解するのは、マドゥスーダナによる付加的要素の読み込みの結果であるということができよう。

残る PD 4.25 は、BhR (Ṭ) では当該の Upad と BAUBhV の引用 (BhR 1.21-22, 24) の直後に以下のように引用される。

BhR 1.25-27

evam etādṛṣaṃ vākyam udāhāryam anekāśaḥ /
cittasya viṣayākāragrāhakatvopapādane // 25 //
ato māṃsamayī yoṣit kācid anyā manomayī /
māṃsamayyā abhede 'pi bhidyate 'tra²⁶ manomayī // 26 // (= PD 4.25)
bhāryā snuṣā nanānda²⁷ ca yātā²⁸ mātety anekadhā²⁹ / (= PD 4.23ab)
jāmātā śvaśuraḥ putraḥ³⁰ pitetyādi pumān api // 27 //

以上のように、[Upad Padyabandha 14.3-4 と BAUBhV 1.2.103 と] 同

²⁵ この点に関して眞鍋 [2021] では考察が及んでいなかったため、この場を借りて訂正させていただきます。

²⁶ 'tra] BGJLNaR; ca I; hi Nb.

²⁷ nanānda] BGIJR; nanaṃḍa LNaNb.

²⁸ yātā] BGIJNaNbR; jñātā L.

²⁹ anekadhā] BGIJNaNbR; anekāśaḥ L.

³⁰ putraḥ] BGIJLNaNbR; punnaḥ Na.

様の文が、心が対象の形相を把握するものであることを証明するために、何度も引用されるべきである。

したがって、肉体から成る女性が「存在し」、ある「肉体から成る女性とは」別の思考器官から成る「女性も存在する」。肉体から成る女性と「本質上」異なっていなくとも、ここでは³¹ 思考器官から成る「女性」は「様々な」に」区別される。

妻、息子の妻、夫の姉妹、夫の兄弟の妻、母、と「同じ女性が」多様に「異なる」。義理の息子、義理の父、息子、父等と、男性も「多様に異なる」。

マドゥスーダナは、議論の展開上、PD 4.25 冒頭の“maivam”を“ato”にする等、若干の語句変更をして PD 4.25 を引用している。しかし、BhR 1.25-27 の流れとしては、BhR 1.25 で当該の Upad と BAUBhV の引用を受けて心が外界の対象の形相を把握するものであると結論づけ、1.26 (=PD 4.25) で外界の対象は一様であるけれども、それを対象とする人に応じて思考器官の形相が多様となることを述べ、1.27 でその思考器官の形相が多様となる実例を提示しており、当該の BhR 1.26 (=PD 4.25) は PD の個我による創出説と異なったことを意味しているようには思われない。そのことは、BhR 1.27 の実例の前半が個我による創出説を説いた PD 4.23ab³² と一致していることから伺えよう。ところが、PD 4.25 は対象認識の文脈に置かれていたことを考えると、この BhR 1.26 は BhR におけるバクティ理論という感情論においてどのような位置を占めているのか、ということが問題となろう。

そこで、当該の Upad, BAUBhV, PD の引用箇所以前の BhR (Ṭ) の議論に目を移して見ると、BhR 1.15-18 の議論³³ が、特に BhR 1.26 の議論と関係

³¹ この“atra”が具体的に何を意味しているのか不明である。fn. 26 で示したとおり異読も存在するので、テキスト訂正も視野に入れつつも、これが何を意味しているのかということの確定を今後の課題としたい。

³² 本稿では、cd 句が異なるため、BhR 1.27 を PD 4.23 の引用として扱わなかった。

³³ 直前の BhR 1.14 に依れば、BhR 1.15-18 はサーンキヤ学派の見解に依拠したものであ

していることが伺われる。

BhR 1.15-18

tamorajaḥsattvaguṇā³⁴ mohaduḥkhasukhātmaḥ /
tanmayī prakṛtir hetuḥ sarvaṃ kāryaṃ ca tanmayam // 15 //
triguṇātmakam evaikavastu³⁵ tryākāram ikṣyate³⁶ /
nijamānasasaṃkalpabhedenā puruṣais tribhiḥ // 16 //
kāminyāḥ sukhatā bhartrā³⁷ sapatnyā³⁸ duḥkharūpatā /
tadalābhāt tathānyena mohatvam anubhūyate // 17 //
evaṃ sati sukhākāraḥ praviṣṭo mānase yadā /
tadā sa sthāyibhāvatvaṃ pratipadya raso bhavet // 18 //

暗質性・激質性・純質性は、[それぞれ] 当惑・苦・楽を本性とする。それらから成る原質は原因であり、それらから成る全てのものは結果である。

る。BhR 1.14: iti vedāntasiddhānte¹⁾ sthāyino²⁾ rasatoditā / sām̐khyarāddhāntam³⁾ āsṛityāpy adhunā pratipādyate // (以上、ヴェーダーンタの定説において、恒常的な[感情]が情趣であると述べられた。サーンキヤの定説に依っても、[恒常的感情が情趣であることが] 今から説明せられる)。1) °siddhānte] BGIJNaNbR; °siddhānta° G. 2) sthāyino] IJLNaNbR; sthāpino BG. 3) sām̐khyā°] BGIJNaNbR; sām̐kyaṃ L., °rāddhāntam] ILNb; °siddhāntam BGJNaR. しかし、思考器官が対象の形相を把握するという点に関しては、アドヴァイタ学派とサーンキヤ学派は共通しているので、定説として認められてもいる。BhR 1.20: gr̥hṇāti viṣayākāraṃ mano viṣayayogataḥ / iti vedāntibhis sām̐khyair api samyaṇ nirūpitam // (対象との結合に基づいて、思考器官は対象の形相を把握する、ということが、ヴェーダーンタ学派によっても、サーンキヤ学派によっても、正しく確定された)。マドゥスーダナの教学においては無明も三属性から成るものであるもので、原質の実在性を主張するという点以外は、ここでのサーンキヤ学派の主張は認められるものであるということであろう。

³⁴ °rajaḥ°] BGIJLNaNbR; °raja° Na.

³⁵ evaika°] L; ekaikaṃ BGIJNaNbR.

³⁶ ikṣyate] BGJLNaNbR; ikṣate I.

³⁷ bhartrā] BGIJNaNbR; bhartruḥ L.

³⁸ sapatnyā] BGIJNaNbR; sapatnyāḥ L

他ならぬ三属性を本性とする同一の实在物が、[それを対象とする者] 自身の心にある企図 (saṃkalpa) の違いに応じて、三人によって、三つの形相を持つものと見られる。

夫によって、妻は楽と [経験され]、[夫の] 愛人によっては [彼の妻は] 苦をあり方とするものと [経験され]、同様に、彼女 (妻) を得ていないので、他の者によっては [彼の妻は] 当惑 (mohatva) として経験される。

以上のような時、楽の形相が思考器官に入り込んだ時、それは恒常的感情となつてから、情趣 (rasa) となるだろう。

ここでは以下のことが述べられている。すなわち、先ず暗質性・激質性・純質性という三属性がそれぞれ当惑・苦・楽に対応していることが提示されている。そして、その三属性を本性とする同一の实在物が、それを対象とする人の心にある企図 (saṃkalpa = vikalpa, 構想³⁹) に応じて、楽・苦・当惑の三つの形相で経験されるというのである。BhRT によれば、このことは同一の实在物を対象とした心 (思考器官) が、その实在物をどのように認識するかによってその实在物の暗質性・激質性・純質性の部分が際立ち、当惑・苦・楽という三つの形相を持つようになるということである⁴⁰。そして、同一の

³⁹ fn. 40 の BhRT によると、この “saṃkalpa” は “vikalpa” の意味に近いようである。

⁴⁰ BhRT 53, 10-54, 7 (on BhR 1.17): **bhartāraṃ** prati hi **kāminyāḥ** sattvāmśa evodricyate. **sapatnīm** prati tu¹⁾ **rajomāṣaḥ**²⁾ **tām** kāmaya mānam³⁾ **anyaṃ** ca **tām** avindantaṃ prati⁴⁾ tamomśa eva. ataḥ⁵⁾ krameṇa teṣu⁶⁾ sukhaduḥkhaviṣādaḥ prādurbhavanti, ato vyavasthōpapatīḥ. vāsanābhēdenaikasminn⁷⁾ api⁸⁾ bhānābhēdo bhaṭṭācāryair apy uktaḥ — parivrāṭkāmukaśunām ekasyām pramadātānau / kuṇapaḥ kāmīnī bhakṣyam iti tisso vikalpanāḥ⁹⁾ //¹⁰⁾ iti¹¹⁾ (実に、夫に対して、妻は純質の部分だけが際立つ。一方、[夫の] 愛人に対して、[妻は] 激質の部分だけが [際立つ]。彼女を望んでいて、彼女を得ていない別の者に対して、[妻は] 暗質の部分こそが [主要である]。したがって、順に、彼ら (夫等) において [同じ妻に対する] 楽・苦・落胆 (viṣāda) が顕現する。したがって、区分設定が可能である。潜勢力の違いによって、同一のものにおいても、顕現の違いがあることが、[クマーリラ・] バッタ先生によっても述べられた。—— 苦行者・[男性の] 恋人・犬にとって、同一の女体に対して、死体、[女性の] 恋人、食物という

実在物が三つの形相で経験される実例として、夫にとって妻は楽として、また夫の愛人にとって彼女は苦として、彼女を得たいけれども得られていない別の者にとって彼女は当惑として経験される⁴¹ということが提示されている。

最後の BhR 1.18 における恒常的感情 (sthāyibhāva) と情趣 (rasa) に関する言及は、用語それ自体はインド詩論におけるラサ論で一般的に使用されるものであり、バクティに限定されるものではない。そのため、これだけでバクティとバクティの情趣 (bhaktirasa) に直接言及したものと言うことはできない⁴²。ここでは、バクティとバクティの情趣を含めた恒常的感情一般、

三つの構想がある — と). 1) tu] BGIJNaNbR; om. L. 2) rajoṃśaḥ] ILNaNb; rajoṃśa eva BGJR. 3) kāmayaṃānam] BGIJNaNbR; kāmayaṃānam L. 4) prati] IJLNaNbR; om. BG. 5) ataḥ] BGIJNaNbR; evaṃ L. 6) teṣu] BGIJNaNbR; om. L. 7) vāsanābhedenaika°] BGIJNaNbR; eka° L. 8) api] BGIJNaNbR; api vāsanābhedenā L. 9) vikalpanāḥ] BGIJLNaNbR; vikalpanā Na. 10) Cf. ŚV *Śūnyavāda* 59: parivrāṭkāmukaśunāṃ kuṇapādimitis tathā / dīrghahrasvatvabuddhiś ca hy ekasminn apy apekṣayā // 安藤 [2020: 179, fn. 47] によれば、BhRṭ に引用されている偈は、Nāgārjuna の *Bodhicittavivarāṇa* とマーダヴァの *Sarvadarśanasamgraha*、古ジャワ金言集の *Sārasamuccaya* に見られる。11) iti] BGIJLNaNbR; om. Na.

⁴¹ この「別の者」に関しては、BhRṭ の記述を参照した。また、BhRṭ は「当惑」(moha) を「落胆」(viśāda) と言い換えている。fn. 40 の BhRṭ を参照。

⁴² BhRṭ においても、特にバクティの情趣に限定したことが述べられているのではない。むしろ、楽を本性としながらも、どのように他の情趣が成立するのかということが述べられている。BhRṭ 54, 8-12 (on BhR 1.18): krodhādibhāvasyāpi rajastamomiśritasattv-odrekanibandhanacittadrutiphalitavāt¹⁾ sukhamayavatm²⁾ ity abhiprāyaḥ. dravibhāvasya sattvadharmatvāt taṃ vinā ca sthāyibhāvāsambhavāt sattvaguṇasya ca sukarūpatvāt³⁾ sarveṣāṃ bhāvānāṃ sukhamayatve 'pi rajastamoṃśamiśraṇāt tāratamyam avagantavyam. ato⁴⁾ na sarveṣu raseṣu⁵⁾ tulyasukhānubhavaḥ (瞋恚 (krodha) 等という感情であっても、激質と暗質と混ざり合った純質の増大を原因とする心の蕩けの結果であるので、楽から成る、という趣意である。蕩けることは純質の特性であるので、またそれ(蕩けること)なしでは恒常的感情は不可能であるので、また純質性は楽をあり方とするので、全ての諸の感情が楽から成るものであったとしても、激質の部分と暗質の部分との混合から、[楽の] 段階が理解されるべきである。したがって、全ての情趣において、同等の楽が経験されることはない)。1) 'miśritasattvo'] BIJLNaNb R; 'miśritatvo' G., 'nibandhana'] BGIJLNaNbR; 'nibadhana' Na., 'phalita'] BGJNbR; 'pratiphalita' ILNa. 2)

情趣一般について言及していると考えられる⁴³。

以上の BhR 1.15-18 のうち、BhR 1.16-17 の記述が当該の BhR 1.26 (=PD 4.25) と特に関連していると考えられる。その理由は以下のである。すなわち BhR 1.26 と直後の BhR 1.27 は、一様の外界の対象である女性に対して、人によってその女性を対象とした思考器官の形相が妻や息子の妻等というように多様になることを述べたものであった。この BhR 1.26-27 における思考器官の諸形相が、BhR 1.16 の同一の实在物を対象とする者の心にある企図／構想 (saṃkalpa) の違いのことを指していると考えられ、その心にある企図／構想の違いに応じて、楽・苦・当惑という三つの形相が経験されることを例示しているのが BhR 1.17 であるからである。そして以上のように考えると、BhR 1.26 は、外界の対象である女性を対象とした思考器官の形相が、認識者に依じて妻や息子の妻等となることを単に述べているだけではなく、さらにその諸形相に応じて、当の認識者に楽・苦・当惑といった感情的な諸形相が生じることも示唆していると考えることができる。そしてそのように考えないと、バクティをはじめとする恒常的感情を主題とする BhR の感情論的文脈に対象認識の議論である BhR 1.26 を位置づけることは難し

⁴³ mayatvam] BGJLNaNbR; ⁴⁴ mayam I. 3) sukhārūpatvāt] BGILNaNb; sukhamayatvāt JR. 4) ato] BGJNaNbR; tato L. 5) raseṣu] BGJNaNbR; om. IL.

⁴⁵ マドゥスーダナは、以下の記述によると、バクティと、ラサ論におけるその他の恒常的感情との違いは、心が蕩けていること、恒常的な心的活動であること、さらにその対象が最高神であることという条件を全て備えているか否かに違いがあると考えていたようである。BhRṬ 34, 11-35, 7 (on BhR 1.3): adravāsthāyām dhārāvāhiky¹⁾ api vṛttir dravāsthāyām apy āsu vināśini sā, dravatvadhārāvāhikatvayuktāpi²⁾ sarveśāviṣayā³⁾ na bhaktiḥ ([心的] 活動は、蕩けていない状態においては流れを持つものであったとしても [バクティではなく]、それ (心的活動) は、蕩けの状態にあったとしてもすぐに消滅するものは [バクティではなく]、蕩けていることと流れを持つものであることと結びついているとしても、全てのものの主を対象としない [心的活動] はバクティではない)。さらに、バクティの情趣とその他の情趣の違いは、バクティから発生するものであるか否か、という点にあると考えられる。1) dhārā] BGJNaNbR; dhāri L. 2) yuktāpi] IJLNaNbR; ⁴⁶ prayuktāpy B; ⁴⁷ prayuktā G. 3) sarveśāviṣayā] NaNb; asarveśāviṣayā BGJR; sarveśāviṣayā L.

いだろう。

さらにここで、以下のことも指摘できよう。上記の考察結果によると、マドゥスーダナの BhR 1.26 の解釈は、PD の個我による創出説における感情の発生過程と異なったものではなく、外界の対象から思考器官の感情的形相が生じるという過程の間に、思考器官の対象認識的形相が生じるという一過程を挿入したものと考えることができる⁴⁴。このことは、ある対象に対する感情はその対象を認識してから生じる、というある意味常識的な過程に従ったものであり、PD における感情の発生過程では曖昧だった一過程を明示したものと言えよう。

4. 結論

以上 PD と BhR (Ṭ) を検討してきた結果、PD における個我による創出説と BhR (Ṭ) におけるバクティ理論との関係について、以下のように述べることができよう。PD における個我による創出とは、主宰神によって創出された一様の外界の対象に対して、人によってその思考器官が獲得する形相が異なり、その結果多様な諸形相が生じ、それを対象として知（認識）または感情が生じる、という認識・感情に共通した発生過程における「思考器官が対象の形相を得る、思考器官に対象の形相が生じる」という点を、個我による「創出」と存在論的に捉えたものであった。そしてこの思考器官に生じる形相は、例えば女性に対する「妻」等といった対象認識的なものと、宝珠に対する「好ましいもの」等といった感情的なものの双方を含む、個我の享受対象としてのものであった。

では、以上の存在論的な個我による創出説を、マドゥスーダナはどのようにバクティ理論という感情論に接合したのであろうか。マドゥスーダナはバクティ理論を形成するに際し、個我による創出説における感情の発生過程を、

⁴⁴ PD においても、個我による創出は思考器官の活動を本性とする個我の企図／構想 (saṃkalpa) によるものであると述べられていた。fn. 11 参照。

存在論的側面に触れないで受容している。その際に彼は、思考器官が外界の対象に対して好・悪・無関心といった感情的な諸形相を獲得する前段階に、例えば女性に対する妻等といった、対象認識的な諸形相を獲得するという一過程を明示していると考えられる。さらに、恒常的感情という特殊な感情の発生過程を主題としているために、思考器官が対象の形相を獲得する前に、「心が蕩けている」という条件をも読み込んでいる、と考えられる。

(本稿は、JSPS 科研費 21K12843 による研究成果の一部である)

参考文献

一次文献

- BAUBhV *Bṛhadāranyakopaniṣadbhāṣyavārttika* (Sureśvara): *Shri Sureśvaracharya's Brihadaranyakopanishad Bhashyavartikam Vol. 1 (I & II Chapters) With the Commentary Shastraprakashika of Shri Anandagiri Acharya*. Ed. Shri S. Subrahmanya Shastri (Advaita Grantha Ratna Manjusha Ratna 23) Varanashi: Mahesh Research Institute 1982.
- BhR(Ṭ) *Bhaktirasāyana(ṭikā)* (Madhusūdana Sarasvatī): B, G, I, J, L, Na, Nb, R (底本は J)
- B *Bhaktirasayanam*, British Library, EAP781/1/4/165, Accessed July 20, 2019. <https://eap.bl.uk/archive-file/EAP781-1-4-165>.
- G *Śrībhagavadbhaktirasāyanam Śrīmanmadhusūdanasarasvatīyativaraviracitam*. Ed. Prema Parapa Gosvami Damodar Shastri. Kāśī: Acyutagranthamālā 1927.
- I 93-5_Bhagvat Bhakta Rasayanam of Madhu Sudan Saraswati_Bhakti- Manuscripts by I_AM_VISIONARY_TUNES. Accessed May 5, 2019. <https://ia800601.us.archive.org/31/items/935BhagvatBhaktaRasayanamOfMadhuSudanSaraswatiBhaktiManuscriptsB>

- yIAMVISIONARYTUNES/93-5_Bhagvat%20Bhakta%20Rasayan
am%20of%20Madhu%20Sudan%20Saraswati_Bhakti-%20Manuscr
ipts%20by%20I_AM_VISIONARY_TUNES.pdf.
- J *Śrīmadhusūdanasarasvatīpraṇītaṃ Śrīmadbhaktirasāyanam*. Ed. &
Com. Janārdhanaśāstrī pāṇḍeya. Vārāṇasī: Motilal Banarsidas 1961.
- L Madhusudanarasvasati Bhagavadabhakti-Ratnavali, Ref 4856.
Lalchand Research Library Ancient Indian Manuscript Collection,
Accessed July 18, 2019. <http://www.dav.splrarebooks.com/collection/view/Bhagavadabhakti-Ratnavali1>.
- Na B 40/1, National Archive in Nepal.
- Nb D 85/7=E 2634/6, National Archive in Nepal.
- R *Śrīmadbhaktirasāyanam Ullāsatrayollāsitaṃ Ṭikāṭippaṇyādibhir
upaśobhitaṃ*. Ed. Damodara Namputirippat. Kāśī: Śrīsāṅgavedavi-
dyālaya1950.
- KP *Kalyāṇapīyūṣa* (Rāyaprolu Liṅganasomyāji): *Śrīvidyārāṇyakṛta
Vedāntapaṃcadaśī: Kalyāṇapīyūṣavyākhyāsametā*. Ed. Rāyaprolu
Liṅganasomyāji. 1942.
- Upad *Upadeśasāhasrī* (Śaṅkara): *Upadeśasāhasrī by Śrīmad Bhagawat-
pādācārya with the Commentary Padayojanikā by Śrīmad
Rāmatīrtha, Part I & II (Prose and Poetry)*. Ed. Wāsudev Laxuman
Śāstrī Paṇṣīkar. Bombay: Nirṇaya Sagar Press 3rd Ed. 1930.
- PD *Pañcadaśī* (Vidyārāṇya): *Pañcadaśī of Vidyārāṇya with commen-
taries Padadīpikā by Ramakrishna and Pūrṇānandakaumudī by
Achutaraya Modak*. Ed. R. S. Godhalekar. Pune: Jagad Hitecchu
Press 1880.
- PDī *Padadīpikā* (Rāmakṛṣṇa): See PD.
- PK *Pūrṇānandakaumudī* (Achutarāya Modak): See PD.

二次文献

- Dhole, Nanda Lal., trans. 1899. *Panchadasi of Srimad Vidyaranya Swami*. (Sri Garib Das Oriental Series No. 317) Calcutta: 2nd ed., Delhi: Sri Satguru Publications 3rd ed.
- Goodding, Robert Alan. 2002. "The Treatise on Liberation-in-Life: Critical Edition and Annotated Translation of The *Jīvanmuktiviveka* of Vidyāraṇya," Texas: The University of Texas. (Doctoral Thesis, Unpublished).
- Gupta, Sanjukta. 2006. *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*, London and New York: Routledge.
- Joshi, Veneemadhava-Shastri B. 2008. *Vidyāraṇya's Contribution to Advaita*. Delhi: Parimal Publications.
- Mahadevan, T.M.P. 1938. *The Philosophy of Advaita*. Delhi: Bharatiya Kala Prakashan, 1st Revised ed. 2006.
- Nachane, Sulochana A. 2000. *A Survey of Post-Śhṅkara Advaita-Vedānta of S. A. Nachane*. Ed. R. K. Panda. Delhi: Eastern Book Linkers 2000.
- Nelson, Lance E. 1986. "Bhakti in Advaita Vedanta: A translation and study of Madhusudana Sarasvatī's Bhaktirasayana." PhD. diss., McMaster University. Accessed June 15, 2015. <https://macsphere.mcmaster.ca/handle/11375/14225>.
- . 2004. "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurusaṛtha in Gaudiya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī", *Joural of Indian Philosophy* 32: 345-349.
- Prem Pahlajrai. 2005. "The Authorship of the *Pañcadaśī* and the Textual Context of its *Tr̥ptidīpa-prakaraṇa*." Washington, D.C.: University of Washington. (Doctoral Thesis, Unpublished).
- Shastri, Hari Prasad., trans. 1954. *Panchadashi: A Treatise on Advaita Metaphysics by Swami Vidyaranya*. London: Shanti Sadan Repr. 1982.
- Swāhānanda, Swāmī., trans. 1967. *Pañcadaśī of Śrī Vidyāraṇya Swāmī*. Madras: Sri Ramakrishna Math.
- 安藤充. 2020. 「古ジャワ金言集 *Sārasamuccaya* 訳注研究 (3)」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』35：159-183.
- 前田専学. 1988. 『ウパデーシャ・サーハスリー——真実の自己の探求』岩波文庫.
- 眞鍋智裕. 2018. 「マドゥスーダナのバーガヴァタ・ブラーナ註における四姓・四住期制度 超克の論理」『論集』第45号：(125)-(144).
- . 2021. 「後期アドヴァイタ学派における知識の神学から感情の神学への転換——*Bhaktirasāyana* における先行文献の感情論的再解釈」『南アジア古典学』第16号：283-297.